

日本記者クラブ会報

第 444 号
2007 年
(平成 19 年)
2 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
◎ 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

外遊直後 安倍首相が会見

新春1月は、極力、首相をゲストに招くようにしている。うまくいくときもあるし、ダメなこともある。

昨年11月、総理秘書官を訪ね相談した時点では、通常国会前の外遊日程はないだろうということで、官邸サイドも「喜んで招待に応じます」ということだった。十分に時間を取って、ナショナル・プレスクラブで

会見し、安倍路線をより鮮明にしたという積極的な意向がうかがわれた。安堵した。

ところが、年末には事態急変。欧州歴訪が浮上し、おまけに12月中旬のセブ島での東アジアサミットが台風で順延に。これも1月にずれ込むことになってしまった。

玉誠

内閣総理大臣

安倍晋三

平成十九年一月十六日

そんなわけで、9日に発送した案内では会見時間は30分。これを受け取った会員からこんな抗議のファックスも。「モザンビークの大統領が1時間の会見なのに、なぜ30分なのだ。今回は

抗議のため欠席する」。昨年来の経緯を知る事務局としては、30分でも、よく時間を割いてくれたという気持ちなのだが、一般にはそうは受け取ってもらえない。

しかし、偶然とは恐ろしいもので、この某会員の怒りが通じたのか、その直後に首相に随行していた秘書官がロンドンから電話をしてきた。なんとかやりくりして1時間確保するようにしました、と。

滝鼻理事長も、すでに決まっていた自身の予定をキャンセルして、国会に当たり、異例の夜の首相会見となった。すでに内容は当夜のテレビや翌日の朝刊で報道されているので省くが、参加した大先輩たちの評価も上々だった。焦点が絞られた鋭い質問が続き良かった、と(3頁参照)。

新年の首相会見を終えて間もなく、民主党から連絡が入った。年末から折衝していた小沢代表の会見が、こちらの希望通り2月初めで確定した。こちらは1時間30分、冒頭発言は短いものにして、質疑応答を主体にしたいとのことだった。政治決戦の年の主人公二人の会見が実現して、クラブの船出はまずは順調と自賛している。

好印象残したゲブーザ大統領

これほどびつたりの司会者はめったにいない。竹田保孝理事(共同)は、飢餓・内戦の取材で2度モザンビークを訪れている。80年代半ばに独立記念日を取材した時には、儀仗兵が空腹のため数人倒れたという。それを見越して交代要員が後ろにいたとか。食事はくずパンとコーヒ、市場には野菜だけだったと、会見後、回顧談を。

国交樹立30周年で公式訪問し、会

見(1・22)したゲブーザ大統領は3代目。いまや最貧国の汚名を返上し、外資導入で最近では7〜8%台の経済成長。アフリカの優等生に。

大統領が困難さを一歩強調したのはエイズへの対応だった。誠実で配慮の行き届いた大統領の答弁に、若手記者たちから次々手があがった。規模も関心も小さいが、やってよかったと満足感に浸れる会見だった。

(専務理事 岩崎玄道)

藤原 和博 杉並区立和田中学校長

1・12(金)研究会「若者と教育」②
司会 菅沼堅吾委員 出席 65人

▼たった一人からの教育改革

「さだまさし」そっくり

さんの藤原和博・和田中学校長は、東大卒後リクルート社に入り同社



フェロー、杉並区教委参与を経て、03年4月に都で初めての民間人校長に就任した。「たった一人からの教育改革」に取り組む熱血漢である。最初に教育界の現状を①生徒のコミュニケーション能力技術の劣化(全て完成品が提供される超便利社会でしゃべる必要なし)②両親不在の家庭や無関心の地域社会から教育全てを学校に押し付けられたことによる学校機能の低下、と指摘した。

これを改善する試みとして、藤原さんが考案したのは、「ドテラ」(土曜寺子屋)を核とする和田中の地域本部と「よのなか科」授業というユニークな発想と着実な実践である。「ドテラ」は「学ボラ」と称する教員志望大学生ボランティアを30教員集め、毎土曜日に10〜15人が百人

ほどの希望生徒と勉学に取り組む。勤めに出る母親が家庭で基礎学力を支えられない点をカバーする。

「よのなか科」は一般に学校ではタブーとされる社会問題を校長自ら講義し、自由にディベートさせる。例えば少年法の模擬法廷、自殺しようとする者を抑止する説得術、離婚経験者を招いて結婚と離婚の実態、少子化問題や生殖医療と倫理など、確かに学校が避けて通りたい問題に正面から取り組む。もちろん大人も自由に参加し生徒と一緒に考えてみる市民講座でもある。

こうして、和田中では教師が本来の仕事である授業、部活、生活指導に取り組むことができるようになった。教育改革は法規や制度の改正ではなくて運用の改善だと言うのが藤原さんの持論であり、教師が僧侶兼務を許されるように年取補完可能な民間人の兼務校長を全国に3千人導入してから、制度をいじっても教育再生は間に合うと提案している。

東京新聞出身 松永 太

大田 弘子 経済財政担当相

1・15(月)記者会見 司会 広瀬和彦委員
出席 137人

▼追加利上げを強くけん制

日銀は1月17、18日の金融政策決定会合で追加利上げを見送ったが、大田経済財政担当相の会見が行われた15日は、市場やマスコミが依然追加利上げの公算がかなり大きい」と予想していた微妙な時期であり、大田経財相の発言に関心が集まった。

大田経財相は、①日本はデフレから脱却しようとする極めて重要な時期②昨夏から消費が弱い③12月の決定会合後、消費の判断材料に変化はない」と指摘し、「日銀は、説明責任を果たしながら、金融面で持続的な景気と、デフレ脱却の道筋を支えてもらいたい」と述べ、追加利上げを強くけん制した。さらに「低金利の是正はされるべきだが、タ

イミングの問題がある」として日銀の「金利正常化論」に「時期尚早」とクギを刺した。決定会合での議決の先送りを求める「議決延期請求権」



の行使についても、「政府として決めていく」と述べ、可能性を否定しなかった。

これらの発言の背景には、11年度に名目3%台後半の高成長を目指す安倍政権の上げ潮路線に整合的な金融政策を日銀に求める意図があった。

今回は、最終的に日銀執行部が政府に歩み寄って利上げを見送ったと見られるが、政府・与党の目指す「力強く安定的な成長」(安倍晋三首相)と、日銀が志向する「息の長い成長」(福井俊彦日銀総裁)の溝は埋まらないまま残されている。

大田経財相の会見での金融政策以外の発言では、▽医療・介護・教育分野の規制緩和で消費需要を喚起して成長を高める方針を示した点▽経済財政諮問会議で民間議員が提案した省庁による公務員の天下り幹旋の禁止にあらためて意欲を示した点などが注目される。

毎日新聞経済部 尾村 洋介

安倍 晋三 首相

1・16(火) 記者会見 司会 滝鼻卓雄理事長
出席 263人 写真 栗田格会員

▼鋭い質問に穏やかな答え

安倍晋三首相はいま苦境に立たされている。安倍政権のレゾネートは「人気」にあるのだが、発足当初に高かった内閣支持率が急落しているためだ。

日本記者クラブでの記者会見に臨んだのも、ぼん回策の一つかと思っただが、結果的にみてさほどの効果はなかったようだ。

安倍首相自身、内閣支持率の低下傾向について「コップの水を見て、これだけ減ったとは考えません。こんなにまだあるのかと考えます」と意に介していないことを強調していた。

それでは全く人気を気にしていないのかというと、そうでもない。例えば、ホワイトカラー・エグゼンプション法案(いわゆる残業代ゼロ法案)について、質問者が「法案見送



りでは、不人気でもやるという勢いがそがれるのではないかと挑発したが、「国民の理解が得られていない」と不人気政策は取り上げられないとの姿勢だった。

実は、この記者会見で目立ったのは質問の方だった。「政治とカネの問題が取り上げられるスキヤンダル国会では、総理の強いリーダーシップが必要ではないか」「当面、増税なしでやっていくとの新しいイニシアチブを打ち出す考えはないのか」「ブッシュ米大統領の新しいイラク政策に対しては、米国内でも評価が分かれているのに、どういう信念で新しいイラク政策を支持したのか」など、鋭いものが多かった。

残念ながら安倍首相の答えはよく言えば穏健、ほとんどが紋切り型のもので、これでは人気巻き返しはおぼつかない。これらの質問に対して「正攻法で臨む」(安倍首相)ことが展望を切り開く道だろう。

共同通信論説委員長 井芹 浩文

ジョン・ボルトン 前米国連大使

1・17(水) 記者会見 司会 春名幹男
委員 通訳 池田薫 出席 119人

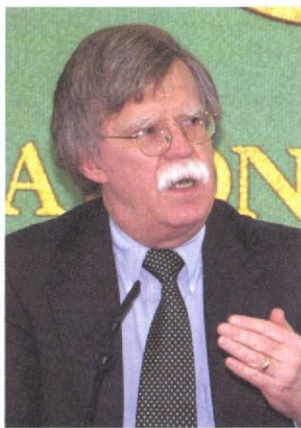
▼6カ国協議「失敗」と認定

人を語るとき、富士山という言い方がある。遠くで見れば美しいが、登ってみれば石ころだらけ。遠目ではいい人でも、近くに寄ればそうではない例は少なくない。

ワシントンでの取材経験のある仲間たちに聞くと、例外はあるが、民主党系は富士山型が多いらしい。一方、共和党には見た目とは裏腹に腰の低い人が目立つ。厚い胸板を誇り、茶目っ気もあるアーミテージ氏が典型である。

ボルトン氏もそうだ。58歳の実年齢より老けてみせる白髪、白髭、いかにも強面風だ。

国務次官当時に訪日した際、少数の朝食会で何回か一緒にしたが、質問に丁寧に答えるひとだった。こ



の日の会見もそうだった。国連大使を辞め、民間人になっているから、発言は以前よりもさらに率直で時折どきりとさせられた。

北朝鮮をめぐる6カ国協議を「失敗」と認定し、米国や特に中国に新たな政策を求めた。昨年12月、次回日程も決まらないまま休会したのを指すのだろう。メンツにこだわって協議を続けようとするのを「恥の上塗り」とも。究極的な解決は「体制崩壊」とする発言も、普通の外交官ならしないだろう。

面白い反応を期待して、仮に6カ国協議の米代表になったら何をするか、と聞いてみた。「北朝鮮はすぐに席を立ってしまおう」と素っ気なかった。ワシントンでのネオコン(新保守主義者)の退潮を聞かれ「私はネオコンではないし、ネオコンだったこともない。ネオコンはレーガン時代に現実に蹂躪されたリベラルだが、私はリベラルだったことがないからだ」。

一人の会見なのに取材用のテレビカメラが7台稼働していた。

日本経済新聞論説副主幹兼編集委員 伊奈 久喜

アルマンド・エミリオ・ゲブーザ モザンビーク大統領

1:22 (月) 記者会見 司会 竹田保孝
理事 通訳 小松達也 出席 53人



▼エイズ被害の窮状を懸念

クリックとした大きな目が印象的なゲブーザ大統領。人懐っこい笑顔で会場に姿を現した瞬間、ピンと張りつめていた記者会見前の雰囲気が一気に和らいだような気がした。1977年1月に日本と外交関係を樹立してから30年という節目での来日。会見では終始にこやかな表情で、日本との関係強化を訴えた。

日本はかつて、モザンビークでの国連平和維持活動(PKO)に自衛隊を派遣しているが、多くの日本人には馴染みのない国かもしれない。そうした背景もあってか大統領は、日本の経済協力を紹介したのはもちろん、今から400年も前にモザンビークを訪れた日本人がいたという

意外な「史実」を披露するなど、両国の密接な関係を強調した。

会見中、ソマリア情勢と自国のHIV・エイズ被害について質問されると、笑顔の大統領もまゆをひそめた。ともに「敏感な問題」と語気を強め、アフリカ連合(AU)を通じて「ソマリアに平和をもたらす手段」を模索していく決意を表明。エイズ問題では、治療が必要な国民が10万人以上も残っている一方、医師が不足している窮状を訴えた。

アフリカをめぐることは中国が最近、豊富な資源の獲得などを狙って外交攻勢を強めている。胡錦濤国家主席は近く、モザンビークなどアフリカ8カ国を歴訪する予定だ。ゲブーザ大統領は「日本もうまくやっている」と評価したが、日本が国連安

全保障理事会の常任理事国入りに失敗したのは、中国がアフリカ諸国などに働きかけたためとの指摘もある。日本の外務省は外交力の強化に取り組んでおり、アフリカをめぐる各国の外交合戦に注目してみるのも面白そうだ。

共同通信外信部 伊藤 慎司

高原 明生 東京大学教授

▼利害共有—中国の対米外交

「中国は、対米関係は安定しないだろうが、今は『責任ある利害共有者』という扱いでたいへん結構だと考えている」

新年初の研究会「中国外交—中米関係を中心に」で高原教授はこう語った。一昨年、ハーバード大学で送った研究生生活の体験を踏まえた講演は、増大する中国の存在を米国はどう見ているか、内容豊かな国際政治の「講義」になった。

中国の対外関係については、日本も米国ともに懸念と期待を抱く。たとえば、最近、中国が宇宙衛星を弾道ミサイルで破壊したという。これについて、日本側には「宇宙で実験を行なった」としか説明せず、塩崎官房長官が王毅大使に抗議した。

そうした現状を理解するための序論では、中国の外交が歴史的・地理的・政治的にどう位置づけられてきたか、簡明に説明された。

白髪の方も多い聴講者には前置きとして受けとめられたようだが、いまだきの大学生にとっては本論に相当したことだろう。

1:23 (火) シリーズ「中国」③ 司会 藤村幸義委員 出席 102人



その物静かな語り口がいくつかのトピックでは熱を帯びた。

それを列挙すれば、現在の経済発展をもたらした中国の改革開放路線が米中国交樹立と歩調を合わせたものであったこと、90年代後半から上海協力機構やASEANプラス10韓など地域間協力への傾斜が目立つこと、胡錦

濤の温家宝政権は国内問題の多さ、深刻さに頭を痛め、「平和な国際環境維持」という鄧小平指し示をかみし

めながら対米・対日外交を展開しようとしている—など。

冒頭に引用した結論部分を聞いた時、かつて高原教授が、憧憬と対抗意識の背中合わせになった中国人の対アメリカ(中国語では「美国」)感情を「美しき帝国主義者」と読み解いたのを思い起こした。

読売新聞出身 丹藤 佳紀

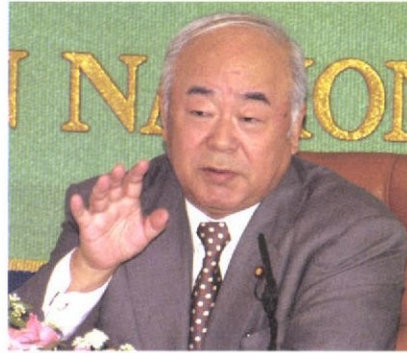
久間 章生 防衛相

▼豪放な性格かハト派の本音か

安倍首相が年頭の記者会見で、政権100日の成果の一つとして強調したのが、防衛庁の「省」昇格だ。久間氏はその初代トップとして歴史に名を残す。約10年前の橋本内閣でも防衛庁長官を務め、沖縄の米軍普天間基地返還合意をまとめた経験があり、手堅い起用とみられた。ところが、どうもこのところ、発言が物議をかます事態が続いている。

昨年末、イラク戦争について「日本は政府として支持すると公式に言ったわけではない」と発言し、直後に「不勉強だった」と撤回した。1月上旬には、普天間飛行場の移設問題で、日米両政府が合意したV字滑走路案の修正に柔軟な姿勢を示したのを、首相官邸との不協和音として報じられた。

そうした中で今回の記者会見だったが、またもや波紋を広げる結果



1・24(水)昼食会 司会 金平茂紀理事
影山日出夫委員 出席 17人

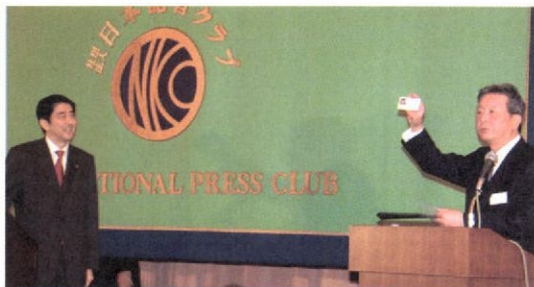
になった。「イラク戦争の大義」についての質問に、「イラクに核兵器

があるかのような状況で、ブッシュ大統領は踏み切ったのだからと思うが、その判断が間違っていたと思う。さらに、米国による戦後処理について、「処方箋がないままだった」と指摘した。

米政府批判とも受け取られる発言に、米側からも厳しい意見が出たという。結局、「開戦判断に関する」感想を言った。そういうふうにとられたとすれば、もう少し言い方を注意しなければならぬ(1月26日の記者会見)と釈明したが、直後にまた普天間関連で米側の姿勢に批判的な発言をして問題になった。

九州男児らしく、細かいことを気にしない豪放な性格が裏目に出ているのか、それともハト派の本音を隠さない確信犯なのか。安倍内閣の中でも、とくに目が離せない1人であることは確かだ。

読売新聞編集委員 赤座 弘一



安倍首相に特別会員証(1.16)

「この会員証でいつでもクラブにお越しください。レストランでお食事でも、バーでちよつと一杯でも。ご利用ください」——欧州4カ国訪問・セブ島での東アジアサミット出席と強行日程をこなした帰国した翌日に会見に応じた安倍首相に、滝鼻理事長から「会員証」が贈られました。新首相が初めてクラブで会見した際に、この「特別会員証」を贈っています。

これまで中曽根康弘、海部俊樹、宮沢喜一、羽田孜、橋本龍太郎、小泉純一郎さんらに贈りましたので、安倍さんで7人目です。

天正遣欧使節団 ゲブーザ大統領は冒頭で、こんな発言をした。400年前にモザンビークを訪れた日本人がいた、と。主要閣僚など随員約10人とほぼ同数の同行記者を伴っての公式訪問。1階の玄関で出迎えたときに「東京は寒くはありませんか」と聞くと、「車の中も部屋も暖かいし、皆さん歓迎してくれるので問題ありません」とほほえんだ▼会見では絶対貧困削減のため「一村一品」を参考に農村開発にも力を入れていくという大統領に、ソマリア情勢関連、エイズ対策、中国と比較しての日本のアフリカ外交などなど——

小松達也さんによってよくこなれたすばらしい日本語に通訳された。押しの強い演出やタクティックなあからさまな言辞はまったくくない▼大島信三会員(産経編集委員)が、最後に「400年前の日本人」についてもう少し話してもらえませんか、と水を向けても、あっさりしたもので。「そう聞いていますのですが、きつと日本側に資料があるでしょう」▼あとで、外務省に確認したところ、それは1586年の天正遣欧使節団のこと。パチカンでローマ教皇に謁見した伊東マンシヨラ4少年は、帰途モザンビーク島(いまは世界遺産で観光名所)で、乗り継ぎ船待ちで6カ月間も滞在した。

(玄)



イーゼル・コーポレーション
チーフエコノミスト
スパー・コリ
メル証券チ
ン日本証
ーフエコノミ

1・19 (金)
司会 長谷川幸洋委員
出席 119人

▼循環的楽観とバブルの影

在日20年のイエスパー・コール氏は日本経済を好意的に見ている。バブル崩壊後は、経済全体が萎縮し失われた10年と言われているが、この間も、日本企業は将来を見据えた投資を行い、その効果は表れているという。こうした投資は07年度も高い水準で推移するとみる。

循環的には楽観的ということだ。とはいえ、個人消費の弱さは気になる。06年度までは企業部門から家計部門へのバトンタッチが進んでいないが、07年度には賃金上昇などを通じて、消費が回復することに期待を込める。そうなれば国民の先行き不安も薄れるというわけだ。

経済の正常化が進む中で金利正常化の必要性も説く。超低金利政策が続けばインフレを招きかねないからだ。安倍政権の経済政策にバブル経済の影を予感するが、そうならないことを願いたい。

毎日新聞論説委員 今松 英悦



加藤 出
東短リサーチ・
チーフエコノミ
スト

1・24 (水)
司会 長谷川幸洋委員
出席 105人

▼2月に「利上げ」と明言

加藤氏は「日銀ウオッチャー」として著名なエコノミストである。金融市場では「加藤さんの発言は、日銀の金融政策を占ううえで重要な『指標』になる」という声もある。

加藤氏は「米国のグリーンズパン前連邦準備制度理事会(FRB)議長は、特定の記者二人を使って『市場の予想』を形成していた」という興味深いエピソードを披露した。話を聞きながら「日本では、加藤氏がその役割を担っているのではないか」と思ったりもした。

当然「日銀の次の一手は」に関心が集まる。加藤氏の見立ては「利上げするとしても、ペースは遅い。(短期金利誘導目標の)0・25%が0・5%あるいは0・75%になっても、大騒ぎするようなものではない。2月には利上げするのかな、と思いつつ」と明言した。さて、当たっているかどうか。

東京新聞論説委員 長谷川幸洋



早川 英男
日銀調査統計局
長

1・29 (月)
司会 小孫茂委員
出席 144人

▼原油下落、長期的にはプラス

早川氏は日銀の景気認識のキーパーソン。1月の利上げ見送り後、2月の金融政策決定会合に向けてどのような景況感が披露されるか、期待して出席した。

早川氏は「日本経済が5年間にわたり2%台で減速も加速もなく成長を続けているのは不思議なこと」と指摘し、その背景と特徴を歴史的・国際的視点から解き明かした。そのように大きなスケールで経済の動きを見ることも、時には必要だろう。

だがそれにしても、肝心なところはうまく逃げられたというのが正直な感想だった。焦点の消費と物価については「上昇は緩やか」と述べたが、明確なコメントは少なかつた。「原油価格下落は短期的には物価にマイナスだが、長期的に見れば日本経済全体にとってプラス」と指摘したあたり、日銀の姿勢がにじみ出ていた。微妙な時期だけに、そのへんが精一杯だったということだろうか。

テレビ東京出身 岡田 晃



木内 登英
野村證券金融
研究所シニア
エコノミスト

1・31 (水)
司会 広瀬和彦委員
出席 103人

▼後半に踊り場脱却

木内氏が描く景気シナリオは「目先は慎重、中長期は強気」だ。木内氏によれば、現在の景気は軽い踊り場に入っているが、今年半ば以降に踊り場を脱却するという。米国経済の軟着陸に連動して輸出主導で持ち直し、内需に波及するためだ。最近の労働需給の逼迫傾向がいずれ賃金を押し上げ消費に波及すると見ており、2008年の景気はかなり活況になるという。

安倍政権の経済政策については「法人税軽減は企業優遇ではない。日本企業の国際競争力が向上し、個人の生活が豊かになる。安倍政権はそれをもっと説明すべきだ」と強調していたのが印象的だった。静かな語り口ながら、論旨は明快で説得力があった。ただ日本経済は「原油価格、金融政策などのリスク」(木内氏)も抱えている。それを乗り越えて、明るい展望が現実となるようお願いしたいものだ。

岡田 晃

■会議報告
第278回会報委員会

(1・12 小会議室)
12月号、1月号について意見交換した後、2月号の編集や今後の「リレーエッセー」のテーマや候補者などを協議した。4月号から交代する「写真回廊」の短文担当者について意見交換した。
出席 住田委員長、石田、伊藤、高橋、西田、松本の各委員。

第361回企画委員会

(1・16 宴会場)
司会をした委員からの行事報告の後、今後のゲスト候補や研究会のテーマなどについて協議した。
新しくシリーズでロシア問題の研究会をスタートさせることとし、担当委員を決めた。
出席 宇治委員長、宮田、中井(良)、中井(康)、脇、菅沼、長谷川、田崎、

川戸、井田、和田、國府、中島、藤村、柴田の各委員。
第353回会員資格委員会

(1・17 小会議室)
2月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。
出席 喜多委員長、石井、高畑、伝川、泉、二藤部、今井、田中、柿原の各委員。

第170回施設運営委員会

(1・25 小会議室)
06年11、12月のアラスカ売上と貸室利用状況を事務局から報告した。
出席 金平委員長、高橋、上滝、加藤、阿部、梅田、池浦、中村の各委員。
第434回理事会(書面)
3月19日(月)に予算総会を開催することを決定した。

リレーエッセー
北国支局② 盛岡



雪は冬に降るもの。10月はまだ秋。そう思い込んでいた東京生まれの私にとって、1964年10月25日朝の光景にはびつくりした。サツ回りに行こうと部屋を出たら、真っ白な雪が舞っているではないか。
空は青いし、雪もしばらくしてやんでしまったから、多分遠くの岩手山あたりからの風花だったのだらうが、それから数日して本格的な雪の季節となった。盛岡支局に赴任して半年。初めて「東北」

を実感した。
盛岡市内は、積雪はさほどではないが、とにかく寒い。日中でも氷点下10数度。道路は凍りつき、チェーンを巻いてもバイクではすってんころり。翌年から中古の四輪車を買ったが、北

かけることができた。雪道を車で遠出する時はシャベルと毛布を積み、万一の場合でも凍死しないよう準備が必要だと、学んだ。
雪が下から降ることもあると知ったのは、奥羽山脈のダム建設現場だった。作業員たちを乗せた小舟が突

雪の教訓―弱音を吐くな

▼老川 祥一

上山脈の山中へ取材の途中、雪道なのになぜかパンクして往生した。
タイヤを交換しようとジャッキをかけても、車体はただ雪に沈む一方。助けを呼ぼうにも車一台通らない。凍りつく手で雪をかき分け、土の部分を掘り出して、やっとジャッキを

吹雪の中を手ぬぐいで頬被りして耐えながら歩くそばを、他社の車が駆け抜けて行く。読売新聞は当時、それほど貧しかったのだ。思わず恨み言が口に出たら、先輩の北原健児記者(現・福島中央テレビ社長)に叱られた。「お前を連れてきたのは、

鼻っ柱の強さを買ったからだ。弱音を吐くな」。
現場については夜明け。写真をとるには工事途中のダムの堰堤をつたって対岸にいかねばならない。つるつるに凍った鉄梯子。暗い湖面の谷底からは猛烈な雪が吹き上げ、目もあけられない。空腹と疲労、恐怖のあの数時間は、4年以上上った今も忘れられない。
先入観や思い込みは禁物。取材に出る時は事前に周到な準備が必要。つらくても弱音を吐くな――。
記者活動の基本を教えてください。は、私の場合、岩手の雪だった。(おいかわ・しょういち 読売新聞大阪本社代表取締役社長)

このシリーズは駆け出しのころ北国支局を経験した会員の、記者青春時代をバトンでつなぎます。

追想、孤高の評論家 伊藤昌哉氏

— その生と死 —



佐藤 雄一

新聞界出身で池田内閣の名秘書官として知られた伊藤昌哉さんが平成14（2002）年12月に85歳で大往生をとげられてからもう4年の月日が流れた。池田氏亡きあとは『自民党戦国史』『新・自民党戦国史』を相次いで著すなど精力的な著作活動、テレビ出演などで政治評論家としても大きな足跡を残された伊藤さんが、いまの政治の姿を見たらどんな論評を下されるだろうか。

伊藤さんには『哲学のない政治家が国を滅ぼす』という著作がある。その中で「政治の哲学は簡にして明だ。ひと一言で言えば、経国済民」にほかならない。経国済民の志に立つて国が置かれている状況と課題を冷静に見据え、それが焦点を結ぶところに政策を打ち立て、その実現のために働くのが政治家というものである。

「目前にある政治家の姿はどうだろう。二流の人物が三流のやり方で第一級の仕事に取り組んでいるとしか思えないのだ」と述べている。その伊藤さんのことだから国民の生活格差が広がっているのに「美しい国へ」という言葉だけが宙に浮く政治には目をそむけるに違いない。

伊藤さんが池田内閣で首相と一心同体となって取り組んだのは「高度成長政策」「所得倍増計画」である。「所得倍増」については見る人の立場によって様々な評価があるだろうが、60年安保騒動で空前の盛り上がりをもせたデモのエネルギーがうたかたのように消え「政治の季節」が「経済の季節」に転換していったことは確かだろう。そうした体験が身にしみているからだろう。伊藤さんが怒りをこめて我々政治記者などに

口にしたのは「池田は国民に夢を与えたが後の政治は国民の夢を奪っているばかりだ」という言葉だった。

『第2の保守合同』 大福提携

伊藤さんは「人間嫌い」を自認するだけあって派手な立ちまわりは極力避けていたが、目立たないようになりながら見事な存在感を示したのは三木内閣末期の福田—大平の「大福提携」だった。昭和49（1974）年、当時の田中内閣の金脈事件による退陣を受けて、「椎名（副総裁）裁定」による三木内閣が発足し、福田赳夫氏が副総理・経企庁長官、大平正芳氏が首相に就任する挙党体制を整えた。しかし、せっかくなの挙党体制も石油ショックによる不況の深刻化や公労協ストに対する社会不安などもあって三木政治は終

始、不安定なままだった。

そうした中で当時、自民党担当の政治記者だった筆者は大平首相の政治指南役視されていた伊藤さんとたびたび話し合い、政局打開の方向について意見を交換した。伊藤さんは政局混迷の背景には田中ヤミ將軍の復権工作があり、「椎名暫定政権」を含みにした「椎名裁定」もその一環に過ぎないことを指摘されていた。

そうした状況下では自民党を二分する福田・大平両実力者が手を結び合い「安定保守」を再構築する以外道がないというのが2人の結論になった。その場合、福田にあっては三木離れ、大平にあっては田中離れが前提だった。

当時、党内や財界の一部にも「大福提携論」はあったが、大方の関心はポスト三木の先陣争いとして2人のいづれが予算編成の主導権を握るかに向けられていた。伊藤さんが大福提携に動いた背景には閣内や所管の大蔵省内でも主計官出身の福田氏の影響力が圧倒的で、盟友の大平首相のカゲが薄い危機感もあったと思う。そうした背景もあって福田・伊藤の秘密会談が12月5日によくやく実現した。

この会談で伊藤さんは「経済危機は深刻だ。経済について勤の働かな

い三木総理では心もとない。大平、福田のいわゆる薩長連合が必要だ。これで乗り切るしかない」と力説している(『戦国史』参照)。このあと、政府、与党の体制について福田氏が福田、大平の総々分離論にふれているが、伊藤さんは「総理・総裁は一体であるべきだ。総理には福田氏が就任し、大平は党の幹事長に回った方がいい」と率直に述べている。

2人の話し合いは2時間以上にも及んだが、当夜、野沢の福田邸を訪ねると福田氏は伊藤さんの熱情にほとんど動かされたと見えて「胸のつかえがとれたようだ」と何度も繰り返していたことが印象に残っている。

伊藤さんは後日、大平派の鈴木善幸氏(後首相)に対しても、「大福提携は第2の保守合同だ。あなたはまとめ役として第2の三木武吉になるべきだ」と説得している。大福提携については後になって「オレがやった」という向きもあったが、伊藤さんの進言で昭和50年度予算が「大福モチ」と称されたほど両者の呼吸がピッタリで編成されたときにすでに大枠が固まっていたのである。

こうした経過を経て福田内閣が成立し、大平氏は幹事長のポストに就いた。

しかし、大福提携内閣が実現した

ものの福田退陣の時期をめぐって党内抗争が再燃し、初めて導入された予備選挙で現職の福田総裁と大平氏それに中曽根康弘、河本敏夫の4氏が立候補した。投票の結果は田中軍団の強い支援を受けた大平氏が第1位となり、福田氏は議員だけの本選挙を辞退して大平内閣が誕生した。

そのシコリが尾を引き、大平首相が解散―総選挙で敗れたこともあって首相の責任論が噴出、内閣不信任案による大平内閣の再度の解散―衆参同日選挙の中で大平首相が病死するという悲惨な結末になった。

それでも、伊藤さんは「大福提携は不幸な結末となったが、それがなければ福田内閣も大平内閣も陽の目を見ることはなく、田中逮捕によるロッキード事件の衝撃も乗り切れなかったろう」と言葉少なく語った。

小泉は長続きする

晩年になってますます人嫌いになった伊藤さんは練馬の自宅書斎に閉じこもる日々になったが、その中でも平成4年から同5年秋まで1年半にわたり栃木県の県紙栃木新聞に「伊藤昌哉『政局を読む』」を連載していた。その全文の復刻と口述筆記、解説に当たった当時の栃木新聞記者小枝義人氏(現千葉科学大薬

学部教授)の執筆した「伊藤昌哉、政論」がこのほど出版されている。

小枝氏によると伊藤さんの口述の際の口ぐせは「天地に仕えるとき、政治家は伸びる」といういかにも金光教の熱心な信徒だった伊藤さんらしい語り口だが、当時、発足したばかりの小泉政権についても「小泉は天地に使われている。この政権は意外に長続きする」と私心のない小泉政治を評価していた。

伊藤さんの晩年は先に触れたようにほとんど外出せず、人とも話さず情報源は毎日、丹念に読む新聞だけだった。淳子夫人によると多い時は政党機関紙を含め8紙にも及んでいたそう、それを視力の衰えた伊藤さんはルーペを使って赤のアンダーラインを引きながら読み込んでいた。

伊藤さん自身も、新聞の読み方を聞いた小枝氏に「新聞は中身の薄いものから順にきめ細かいものを読んでエッセンスを読みとる。午前中は新聞を読むだけでヘトヘトになる。その情報を元に分析・予測する。政治の本質は首相秘書官として官邸にいたときや大平のかたわらでアドバイスしたときと何にも変わっちゃいない。結局、政治家はどうしたら自分の権力維持に得になるかを考えて行動する。だから、新聞報道をみる

と大体分かっちゃう。その際重要なのはだれとだれが会ったという事実だけを伝えてあるベタ記事だよ」と語っている。

「オレは日本経済になった」

伊藤さんが最後まで心配したのは日本経済の先行きで、死期が迫った9月25日わざわざ一人で永田町のキャビトル東急ホテルまで足を運んでくれた。夫人によると筆者が「伊藤さんが最後に会った外部の人」ということらしいが、既に足がむくんで靴も履けない有様だった。それでも政治への情熱はいっこうに衰えず内閣改造を前にして「改造には大義名分が重要なこと」「政策面では失業対策を重視すること」を力説された。

死去される3日前の12月10日に、床から起き上がれなくなった時も「オレは日本経済になってしまった」と語ったという。折からの平成不況の出口が見えない日本経済の先行きを案じてやまなかつた憂国の伊藤さんらしい最期だった。

さとう・ゆういち会員 1931年生まれ 56年東京新聞(のち中日新聞)政治部次長 論説委員 政治担当編集委員など 91年退社 政治評論 日・露医学医療交流財団常務理事など

■ 番記者のつぶやき ■

参院選勝負の小沢さん 変わらぬ取材の難しさ

● 清水 俊介 (中日新聞社)



昨年の退院時(10.5)、番記者に囲まれる小沢一郎代表。記者会見以外で番記者に語るのは珍しい

「まず私が変わらなければいけない」と訴え、小沢一郎氏が民主党代表に就任して9カ月。さすがに「ニユー小沢」という表現は使われなくなった。小沢氏が変わったか変わっていないかはさておき、小沢番記者の取材の難しさだけは変わらない。

□ 現認することが取材

「今日、小沢さん、見た?」。こんな会話が、小沢番記者の間で交わされることは珍しくない。

小沢氏の日程は、記者会見や役員会以外、ほとんど公表されない。「特

日続くこともある。番記者といっても、小沢氏の姿を見ない日はしょっちゅうなのである。

7月の参院選に向けた小沢流の隠密行動だろう、と悠長に構えてもいられない。昨年9月、党大会での代表再任直後に検査入院して以来、小沢氏には健康不安説がつきまとう。退院後は周囲の不安を打ち消すよう

精神的に全国を飛び回っているが、「大丈夫」とは誰も言い切れない。

しばらく姿を見かけなくなると、再び入院したのではないかと不安がよぎる。小沢氏の姿を見ることは、健康確認であり、公表されない日程

をつかんで小沢氏の姿を現認すること自体が、大事な取材なのだ。

その最も確実な方法は、小沢氏の日課になっている朝の散歩。そこで番記者とのやりとりは二言三言なので、筆者はこのところ足が遠のいているが、他社の小沢番曰く、「何を話したかではなく、散歩をしたかどうかが重要なのだ」。

□ メディアの先を意識?

かつて、「記者会見はサービス」と言い切った小沢氏だが、代表就任後は党本部での定例会見など、週に1回ほどのペースで記者の質問に答えている。その際、折に触れて、メディア側に注文を出す。1月の党大会後の会見では、「皆さまにもお願いがある。メディアの報道は8、9割が政府・与党の報道。偏っているのではないか。メディアを通じてしか、国民は見聞きできない」と、民主党報道を増やすよう要請した。小沢氏にとって会見は、サービスから利用するものになったようだ。

小沢氏は最近、嵐の海を進む帆船の船長役で、コミカルなテレビCMにも出演した。小沢氏が「こんなことまでやるのか?」と周辺に語ったというCMは善かれあしかれ、有権者の話題にはなった。

こうした小沢氏の変化は、メディアの影響力を意識しているからにはかならない。ただ、メディアの先の有権者は意識しても、目の前の番記者と親しくする気はないようだ。記者との懇談はほとんどなく、筆者自身、小沢氏に名前と顔を一致して覚えられているか疑問符が付く。

□ 肩身の狭い小沢番

そんな番記者ゆえ、小沢氏の本音に迫るには周辺取材しかない。かつて「側近政治」の権化のように言われた小沢氏も、今は特定の「側近」を重用していかないように思われる。

強いて挙げれば、週に1度は話し合いを持つている菅直人代表代行、鳩山由紀夫幹事長が近い存在。両氏への取材で何とか小沢氏の本音、発言が聞こえてくる。民主党担当記者の間では、「鳩山番の方が小沢氏の発言が取れる」と言われるほどだ。

本音にも迫れず、具体的な発言もなかなか取れない。そんな小沢番は辛い。しかし、小沢氏の今の行動原理だけは、自信を持って言うことができる。「水面下の行動であれ何であれ、それが参院選で勝つために役に立つかどうかだけである」と。

しみず・しゅんすけ 1999年入社
04年東京本社政治部 05年民主党担当

「えっ、レッドソックス？ ヤンキースは一体、何をやっているんだ。プロ野球西武から、入札制度で大リーグ移籍を目指した松坂大輔投手の落札球団が決まった昨年12月、わたしは入札に敗れたヤンキースのだからしなさに毒づいた。

「移籍先の第1希望はヤンキース。第2が同じニューヨーク（NY）のメッツ。第3、4がシアトル・マリナーズとロサンゼルス・ドジャース」。これは松坂の意向ではない。わが共同通信運動部の身勝手な希望だった。この4球団の本拠地にはいずれも共同支局があり、すべてに大



◆ 大リーグ日本人選手急増 ◆

ボストンにも支局開設

● 荻田 則夫（共同通信社）

◆ 歯止めない流出

落札金、6年契約の総額がともに約60億円。破格の大金を動かしたことで、松坂のニュースバリューはさらに上がった。さてレッドソックスのカバーはどうする？ 本拠地のボストンは、飛行機でNYから約1時間。鉄道の便も悪くない。

「先発投手は中4日の登板。NYから4日置きに通わせるか？」「登板しない日に120億円投手にアクシデントがあったらどうする？」「試合はボストンだけじゃない。半分はアウエーで米国全土を回る」「シー

リーグを担当する運動記者を配置している。NY支局には運動記者が複数いるから、メッツに決まっても松井秀喜選手のヤンキースとのすみ分けが可能。松坂が共同の思惑通りに移籍するならば、既存の戦力と配置で十分にカバーが可能のはずだった。

ズンを通し中4日で出張させれば、記者が過労でつぶれてしまう」

松坂以外にも、このオフは日本選手の大リーグ進出が相次いだ。阪神の井川慶投手がヤンキースへ。ヤクルトからは岩村明憲内野手がデビルレイズへ。さらに日本ハムの岡島秀樹投手がレッドソックス入り。昨年10人だったメジャー日本選手は、14人に急増した。ほかに巨人を退団し、マイナーからメジャー昇格を目指す桑田真澄投手もいる。

「井川ヤンキース入り」には、心底ほっとした。岩村の移籍先はフロリダが本拠地。「なんで、そんな遠いところに行くんだ？」。桑田の大リーグ挑戦には「もういい加減してくれ」。ファンには叱られそうだが、取材対象の歯止めのない拡大に、またしても悪態をついてしまった。

◆ 通信社の使命

加盟新聞社からは「松坂の手厚いカバーをよろしく」と早くも注文が相次いでいる。一方、スポーツ新聞社は「松坂や松井秀は自前で取材するから、共同さんにはうちの手の回らないその他の選手をきめ細かくフォローしてほしい」。いずれも通信社として対応しなければいけない課題だ。大リーグ取材態勢をさらに強

化するしかない。新たに運動記者を派遣し今春、ボストン支局を開設することにした。

1985年、共同はNY支局に運動記者を初めて駐在させた。日本のメディアで初の常駐スポーツ特派員の誕生だった。当時、米ツアーで活躍していた青木功や岡本綾子らのゴルフ取材が主な目的だった。

95年にドジャース入りした野茂英雄投手が、日本の野球記者の活動分野を海外に広げた。ロサンゼルス支局に野茂番を置いた。イチロー外野手がマリナーズ入りした2001年に共同はシアトル支局を開設。その後、NY支局の運動要員もデスクを含む3人に増やした。

今季の大リーグ取材は、米4支局の5人の記者を中心に展開する。これだけ陣容を整えても全米に拡散した日本選手すべては追い切れない。松坂や松井秀の活躍を伝えるだけでは読者は満足しない。かつての栄光をかなぐり捨てた桑田の奮闘もリポートしたい。東京から応援出張者を出し、米国在住の契約記者も起用。人練りは苦しいが、可能な限り数多くの日本選手をカバーする。それが「通信社の仕事」だからだ。

おきた・のりお 1979年入社 運動部 シドニー支局など 04年から運動部長

外国人生徒急増

市立高に初のインター
ナショナルクラス開設▶小池 正樹
(静岡新聞社)

定員20人。外国籍の生徒が対象。授業はポルトガル語、英語、日本語で、個別の特別カリキュラムに。ブラジル人が全国で一番多い浜松市。その市立高に4月、公立校では全国初の「インターナショナルクラス」が開設される。リオデジャネイロ州立大から招いた専任講師2人が準備を進め、2月にはいよいよ入試。「子どもたちが日本と母国を結ぶ架け橋になってくれれば」と関係者の期待は膨らむ。だが、背景にある地域の「国際化」の問題は複雑で、外国人の子どもたちの置かれた現状は厳しい。

外国人、特に日系ブラジル人の存在の意味が大きく変化したのはここ10年余り。日本で短期間に稼いで帰国する「出稼ぎ」組が減り、定住化が目立って増えた。その傾向が顕著に現れたのが子ども数だ。市内の小中学校の外国人児童生徒数は1989年に32人だったのが2006年の一学期には1350人余りに、40倍以上にも激増した。そのうち、ブラジル人児童生徒は900人近い。

そこで、当然のように浮上したのが教育の問題だ。「日本語が理解できないと、子どもは学校に来なくなったり、進学が難しかったりして、ドロップアウトしがち」と市教委の担当者は話す。

ある程度日本語ができる生徒にも入試では言葉のハンディがつかまとう。2004年度末の進路先調査によると、市内の中学を卒業した外国人生徒の約80%が進学したが、このうち約40%の進学先は定時制高専門学校。卒業生の本来の希望とは相違がある結果だった。

市国際課によると「実際、浜松で育った外国人の子どもたちには、もっと勉強して日本の大学へ進学したり、日本で就職したい、と考えている子が増えている」という。



学習支援を受ける外国人生徒たち

こうした外国人市民の定住化と子どもたちの進学希望の高まりに対応するため、設置が決まったのが「インターナショナルクラス」で、2年前に市長が開設を表明した。昨年からは外国人小中学生のための「ことばの教室」に高校進学向け特別クラスも設け、進学希望の子どもたちの支援も始めた。

このことばの教室で、10年以上にわたって千人近い子どもたちを見てきたという指導員(54)によると、希望通り進学できた子、経済的理由で通えなくなった子、犯罪に巻き込まれた子、など状況はさまざまだという。それでも今回の特別クラスでは「どの子からも強い進学意欲を感

じる」と言い、インターナショナルクラスへ期待は大きい。ただ、一方で、専門家の言う「ダブルリミテッド」(母国語のポルトガル語も日本語も中途半端にしかできず、学習に必要な言語能力が確立できない状態)の問題が広がり出すなど、外国人児童生徒の教育問題はより難しくなっている。

日常会話は上手なのだが、学習言語が不十分なため授業がちんぷんかんぷんでどうしているのか自分でも分からない子どもたち。そんな児童生徒への対策は急務だ。インターナショナルクラスは一つの光だが、国や行政が掲げる「外国人との共生社会」の実現は簡単ではない。

こいけ・まさき 1980年入社 社会
部 政治部 東京支社編集部などを経て
1995年から 浜松総局編集部

一口メモ 浜松市

人口60万の浜松市に2005年、周辺11市町村が合併し、現在は人口82万。4月には政令指定都市に移行する。市内にはヤマハやスズキ、ホンダなど海外に知られた企業や関連工場があり、外国人労働者が増えている。登録されている外国人は3万人を越し、うちブラジル人は1万9000人。市内にはブラジル料理店が多く、ポルトガル語新聞をコンビニで買えるほか、サンパフェスティバルが開かれるなど、市民は身近にブラジルを感じている。

四国アイランドリーグ

競争激化—独自色ある
チームづくりが必要

▶河田 信也
(四国新聞社)

今春で3年目を迎える野球の独立リーグ「四国アイランドリーグ（I.L.I.）」昨秋のプロ野球ドラフト会議では2人が初の指名を受け、これまでに育成選手を含めて5人をプロ球界へ輩出。全国に名が広まり、球界からも認められたことで存在価値は高まったと言える。

しかし、本年度の赤字額は約1億5千万円の見込み。開幕早々からとん挫しそうになった1年目に比べ、赤字額を半減することに成功したものの、リーグを運営するI.B.L.J.の鍵山誠専務は「軌道修正はできたが、今後も劇的な黒字転換は難しい」と



総合優勝を果たし、芦沢監督を胴上げする香川オリーブガイナースの選手たち（2006. 10. 15）

語る。長期的な継続が約束されたわけではないリーグ運営。そこにきて新たな悩みの種となっているのが、全国各地で独立リーグ熱が高まっていることだ。今年4月には新潟、富山、石川、長野の4県による「北信越ベイスボール・チャレンジ（B.C）」がスタート。来年には九州でもリーグが誕生する予定で、今後も同様の動きは活発化しそうだ。

他地域で野球のリーグが発足すれば、「独立リーグ版日本シリーズ」の開催といった新たな展開が生まれ、相乗効果も期待できる。一方、選手

は給与や練習環境などに関して、より条件のいいチームを選択できるようになり、「市場規模の小さい四国が不利になるのは明らか」（鍵山専務）。実際、昨年のトライアウトで両リーグに合格した選手一人が、北信越に流れているという。

リーグ同士の生存競争という問題。勝ち残るためには何が必要なのか。鍵山専務は「リーグ全体ではなく、4球団が独自の手法で魅力を高め、それぞれに自立していくしかない」と話す。昨シーズン、4球団を分社化したのも、こうした事態を見据えた上での戦略だった。各球団に運営を任せることで、各県の県民性や経済事情などに沿ったスポンサー集めや観客を動員するための興行、チーム強化が可能になった。

高松市に拠点を置く香川オリーブガイナースを例に挙げれば、「県民は強さと高い付加価値を求めると分析。集客力アップのため、元広島の大野浩一投手と元韓国プロ選手を獲得し、話題性とともに連覇を狙う姿勢を明確にした。このほか、徳島インディゴソックスでは「地元出身者を見たい」という要望が強いことから、鳴門高出身の白石静生氏（広島―阪急）を監督に迎え、地元出身

選手の獲得にも力を入れている。

過去2年間の蓄積をベースに、より地域に根ざしたチームづくりを目指して奮闘する各球団。しかし、現実には球団によって収益格差は大きく、昨年の観客動員数を見ても1試合平均で最も多い愛媛は1106人。これに対し最も少ない高知は495人と倍以上の差。しかも分社化したものの、高知だけは地元で球団社長に手を上げる人がいないという事態になっている。

将来的には四国という枠にこだわらず、生き残った球団が単独で別のリーグに参戦、ということも想定しなければいけないかもしれない。

かわだ・しんや 1997年入社 報道
部経済担当などを経て 2003年から
運動部

一口メモ 四国アイランドリーグ

プロ監督の石毛宏典氏が創設、2005年4月に開幕した。球団は高松市にI.B.L.J.（石毛代表）の本拠地を置き、4球団（愛媛マリンバイレーツ、高知ファイティングドッグス、徳島インディゴソックス、アンド・アウエー）を設置。各県1つのチームを擁する。1試合平均の入場者数は1068人だったが、2年目の1500人に減少。採算ラインに達せず、苦しい経営が続いている。



表彰状を手に記念撮影——右から玉、田村、中田、信原の各会員

新年恒例の会員懇親会が、今年から時間帯を昼に移し、1月11日(木)午後1時から開催されました。参加は288人でした。

**5会員がアンケートで9点獲得
最高得点者の弁——こんどは満点を狙って**

玉知夫 (TV朝日取締役)
高い正解率に我ながら感心。
クイズ番組出演もありかな
。不正解は「日経平均2万
円超え」。今年こそ期待した
い。

田村哲夫 (TV東京OB)
2度目の表彰(99年満点)な
ら、65歳にして隠れた才能
があるのを発見!? サラリー
マンももうすぐ卒業。街の予
想屋にでもなろうか。

中田浩二 (読売OB) 座興
で当てずっぽうに答えたの
に、今年は幸先いいなあ。で
も仕事を卒業し新聞、雑誌を
じっくり読む時間ができたか
らと心密かに自負シテマス。

信原尚武 (日本工業監査役・
元産経) 実は社の論調と違
って内心、小泉さんは行かな
いと「8・15」を外してしま
って：ナイショだよ。「イタ
リア」は鉛筆コロコロでお見
事、当たり!

本澤二郎 (東タイOB) 賞
状なんて中学3年以來だ
あ。マスコミの世界で賞状
をくれそうな人をぶつた
いて生きてきたからねえ。と
てもうれしいヨ。(当日欠席)

投票数：328

「わが国の首相は？」回答ベスト5

- ① 安倍晋三 187人
 - ② 福田康夫 71人 自民党総裁選に福田氏が立候補していたら…
 - ③ 麻生太郎 24人 というような予想数字? 今年も同じ質問が
 - ④ 谷垣禎一 15人 ありますが、果たして結果は? 昨年より難
 - ⑤ 竹中平蔵 13人 解かも。
- (次点 小泉純一郎 6人)

「ドイツW杯サッカー優勝国は？」予想ベスト3

- ① ブラジル 171人
 - ② ドイツ 119人 やはり本命ブラジルが圧倒。半数以上がカナ
 - ③ イタリア 10人 リア軍団の躍進を期待していました。
- (次点 フランス 5人)

2006年 (第34回) 予想アンケート結果 (2006年1月10日実施 応募総数 328)

質問	正解	正解率
①12月31日現在、わが国の首相は誰か	安倍晋三	57.00%
②日本の首相が8月15日に靖国神社に参拝する	する	37.20%
③東京証券取引所の大納会の日経平均株価終値が2万円を *2006年大納会の終値は1万7225円83銭	超えない	49.70%
④日銀が政策委員会決定会合で、年内にゼロ金利政策の解除を決めることが *昨年の7月14日解除	ある	79.90%
⑤11月の米国中間選挙で、共和党が上下両院で過半数を維持	しない	60.10%
⑥日本の首相が年末までに北朝鮮を訪問することが	ない	76.20%
⑦日本人がノーベル賞を受賞	しない	58.80%
⑧ドイツで行われるサッカーW杯の優勝国はどこか	イタリア	3.00%
⑨ブルガリア出身の新大関・琴欧州が横綱に昇進	しない	52.70%
⑩プロゴルファーの宮里藍選手が米女子プロゴルフツアーで優勝	しない	54.30%



アンケートで表彰された信原会員（右）を祝福する杉田元理事長（日経・右から2人目）と新実会員（毎日OB）



福引1等のふぐ料理ギフト券は成澤健会員（共同出身＝写真上）に

2、3等の当選者は下記の方々です。

- 2等 = i-Pod
 榊原昭二会員（朝日OB）
 同 = 婦人用手製バック
 佐治俊彦会員（毎日OB）
- 3等 = エルサレム弦楽四重奏団コンサート・ペア・チケット
 川瀬誠一会員（新潟日報支社長）
 同 = 琉球古酒
 堀田稔会員（山形新聞OB）
 同 = 清水焼茶碗
 青野賢太郎会員（NHKOB）

景品提供社のリストは16ページに掲載



左から石村副理事長（NHK）、滝鼻理事長（読売）、朝比奈総務委員長（毎日）



左から目（さっか）・中国、長谷川・京都、安川・西日本、三石・信毎、岡部・神戸、中村・愛媛の各支社長さんたち



▲「満点をとるゾ」—アンケートを投票する吉田副理事長（朝日）とクラブ賞受賞の国正会員（朝日OB）



◀昨年9月に着任した于青・人民日報東京支局長（中央）と語る平田会員（日経・左）、金指会員（日経OB）

マイBOOK マイPR

自白の理由 冤罪・幼児殺人事件の真相

毎日放送報道局長 里見 繁

幼児殺しの汚名を着て8年の刑期を終え、出所した男は雪冤を誓って再審を申し立てた。当時の恋人が自白しているにもかかわらず、なぜ男は犯人に仕立てられたのか。これまでに10本近く冤罪のドキュメンタリー番組を作ってきたが、テレビでは言い足りないこともあり一冊の本にまとめた。「どんなミステリーも冤罪にはかなわない」と言った人がいる。この事件も正しく、事実は小説より

も奇なり、の連続である。

(インパクト出版会 1785円)

急成長する町 淘汰される町―全市町村の5年後10年後

佐貫 利雄

日本の全市町村2,217を成長と衰退の5段階にランキングしたところ、衰退都市が72.4%に達している。とくに東北は89.3%が衰退している。そこでは自殺率が最も高い。他方、成長都市が多いのは、関東などの大都市地域であるが、そこでは凶悪犯罪比率が高い。この現実を

直視するかぎり、経済の論理だけでは解決できない政治の課題があることを見失ってはなるまいと論じている。(大和書房 880円)

介護保険の再出発 医療を変える・福祉も変わる

毎日新聞出身 宮武 剛

「長寿ニッポン」は、まもなく「大量死の時代」を迎える。年間の死者総数は100万人台から160万人台へ跳ね上がっていく。その死亡場所は病院が82%（一部診療所を含む）、自宅死は13%（03年）。病院に頼るならベッド数を増やすほかないが、政府・厚労省は病

院自体を大幅削減しつつある。

私たちはいったい、どこで看取ってもらうのか。それ以前に、どこで最晩年を支えてもらえるのか。現場にあるきながら介護保険の大幅見直しや一連の医療制度改革は、この深刻な問いに答える内容なのか、検証した。(保健同人社 2000円)

コーポレート・コミュニケーション 国際シンポジウム(一九六八―二〇〇四)

日本経済新聞出身 八巻 俊雄

コーポレート・コミュニケーションには広告とPRが含まれる。私が最初に参加したコーポレート・コミュニケーションの国際シンポジウムは1968年に、電通PRセンター(現在電通パブリック・リレーションズ)の社長だった故永田久光氏が創立5周年を記念して行ったPRシンポジウムであった。アメリカで最も有名なPR学者ウイスコンシン大学のスコット・M・カトリップ教授が目玉であった。

この後、13の国際会議にスピーカーあるいは司会者として出席した。コーポレート・コミュニケーション関係が7つ、広告関係が5回、マーケティング・コミュニケーション関係が2つである。(プラトール出版 2100円)

ご提供ありがとうございました

左記の会員社から新年会員懇親会の「福引」の景品をご贈りいただきました。お礼申しあげます。

朝日新聞社 毎日新聞社 読売新聞社 日本経済新聞社 産経新聞社 ジャパンタイムズ 報知新聞社 日刊スポーツ新聞社 日本工業新聞社 スポーツニッポン新聞社 東京ニュース通信社 日本農業新聞 共同通信社 時事通信社 北海道新聞社 河北新報社 秋田魁新報社 福島民報社 下野新聞社 千葉日報社 静

岡新聞社 信濃毎日新聞社 中日新聞社 岐阜新聞社 新潟日報社 北國新聞社 福井新聞社 京都新聞社 神戸新聞社 山陽新聞社 中国新聞社 徳島新聞社 四国新聞社 愛媛新聞社 高知新聞社 西日本新聞社 長崎新聞社 熊本日日新聞社 宮崎日日新聞社 南日本新聞社 沖縄タイムス社 琉球新報 QUICK 日本新聞協会 日本プレスセンター 日本放送協会 東京放送 文化放送 日本テレビ放送網 ニッポン放送 テレビ朝日 フジテレビジョン テレビ東京 ビーエスフジ 毎日放送

札幌テレビ放送 北陸放送 東海テレビ放送 東海ラジオ放送 名古屋テレビ放送 中京テレビ放送 広島テレビ放送 TVQ九州放送 大分放送 日経映像 テレビマンユニオン 日本民間放送連盟 アラスカサントリー 中部電力 電源開発 東海旅客鉄道 東京機械製作所 ヨタ自動車 ナショナルビーアール 日経リサーチ 日本ABC協会 日本原子力発電 日本新聞インキ 日本旅客鉄道 ベネッセコーポレーション 三菱商事(会員名簿順)

「会見速記録」年代別リスト (07.1.25現在)

1970～71年
岡崎嘉平太日中覚書貿易事務所代表 「対中国政策の転換を望む」
藤山愛一郎日中国交回復促進議員連盟会長 「日中国交回復への道」
ウィルフレッド・バーチェット豪州記者 「ピンポン外交の背景と見通し」
竹入義勝公明党委員長 「一つの中国が基本」
田中角栄通産相 「70年代の通産政策」
柏木雄介大蔵省顧問 「国際通貨不安と今後の見通し」
レーガン米大統領特使(カリフォルニア州知事) 「ニクソン訪中は緊張緩和の試み」
1972～79年
アペリー・ブランデー IOC会長 「オリンピックとアマチュアリズム」
小川平四郎初代駐中国大使 「友好維持のため基礎作り専念」
ロバート・インガソル駐日米大使 「成熟期に入った日米関係」
細見卓大蔵省顧問 「通貨外交の確立を」
柳珍山 韓国新民党総裁 「祖国統一のための六項目提案」
ジェラルド・フォード米大統領 「日米パートナーシップ」
昭和天皇・香淳皇后両陛下 「アメリカ訪問を終えて」
司馬遼太郎氏 「庄屋の情報を反省する」
土光敏夫経団連会長 「正念場を迎える日本経済」
福田赳夫首相 「波高し、日本丸の進路」
鄧小平中国副首相 「未来に目を向けた友好関係を」
市川房枝参院議員 「婦人と政治」
ユベール・ブーブメリー「ル・モンド」創設者 「ワタシとル・モンド」
1982～89年
趙紫陽中国国務院総理 記者会見質疑応答
胡耀邦中国共産党総書記 記者会見
ラジーブ・カンジー・インド首相 「国際民主主義をえる非同盟」
コラソン・アキノ・フィリピン大統領 「日本・フィリピンの友好を再確認」
アンドレイ・サハロフ博士 「グローバルなベレストロイカを」
1990～98年
ボリス・エリツィン・ソ連最高会議代議員 記者会見
盧泰愚韓国大統領 「歴史の真実を共有し新しいパートナーシップを」
ネルソン・マンデラ・アフリカ民族会議議長 「黒人解放運動への日本の援助は不十分」
ミハイル・ゴルバチョフ・ソ連大統領 記者会見
胡錦濤中国国家副主席 記者会見
2002～03年
木原正博京大教授 「第2のエイズの時代―若者たちが危ない」
中曽根康弘元首相 「小泉首相への期待と注文」
2004年
養老孟司東大名誉教授 「なぜ『バカの壁』は売れたのか」
ラクダール・ブラヒミ国連事務総長特別顧問 「『イラク』が全てではない」
田代眞人感染症研究所ウイルス第三部長 「新型インフルエンザのいま」
佐藤幸治近畿大学法科大学院長 「司法制度改革の意義と位置づけ」
猪口邦子上智大教授 「国際政治における多国間主義と日本外交」
大沢真理東大教授 「多様化するライフスタイルにふさわしい年金制度を」
宮島洋早稲田大教授 「年金改革から社会保障改革へ」
御手洗富士夫キャノン代表取締役社長 「経営者としての私の挑戦」
王毅駐日中国大使 昼食会質疑応答
2005年
ジェラルド・カーティス・コロンビア大学教授 「非公式調整時代の終わり」
D・シアソン駐日フィリピン大使 「東アジア共同体の形成とASEAN」(日・英)
田中均外務審議官 「東アジア共同体への展望」
保坂修司エネ研中東研究センター研究主幹 「入門、サウジアラビア」
スシロ・B・ユドヨノ・インドネシア大統領 記者会見

クラブHPの「会見速記録」は資料的価値の高い重要ゲストの会見や研究会の記録です。現在、英文のものも含め、100本以上が収録されています。

内藤正典一橋大大学院教授 「欧州と中東」
加藤紘一衆院議員 「靖国問題の本質は何か」
藤原和彦中東ジャーナリスト 「現代エジプト政治を読むポイント」
宗像紀夫元特捜部長/後藤貞人弁護士 「裁判員制度で変わる捜査、裁判」
フレッド・バークステン氏 「東アジア共同体と世界経済」(英文)
韓昇洙元韓国外相 「東アジア共同体と世界経済について」(英文)
辻哲夫厚労審議官 「医療制度改革の厚労省試案」
清水美和東京新聞編集委員 「現代中国『格差』の本質」
M・マクレーン駐日豪大使 「オーストラリアはアジア太平洋地域の強力なパートナー」(英文)
下川正晴韓国外国語大客員教授(元毎日論説委員) 「韓国の言論政策の問題点」
原彬久東京国際大教授 「吉田茂一尊皇の政治家」
麻生太郎外相 「わたくしのアジア戦略」
村瀬清司社会保険庁長官 「社会保険庁解体と新組織へのビジョン」
根来泰周プロ野球コミッショナー 「『競争時代』とプロ野球の在り方」
2006年
チダムバラム・インド財務相 「グローバル経済の推進役としてのアジア」(英文)
麻生太郎外相 「ODA・情けは人のためならず」
武者陵司ドイツ証券東京支店副会長兼CIO 「現在の経済現象を『仮説』する」
片山善博鳥取県知事 「『三位一体』で速のいた自治・分権」
黒田東彦アジ銀総裁 「繁栄するアジア共同体の構築に向けて」
J・キャロン駐日カナダ大使 「アジア太平洋共同体構想―カナダの視点」
厳善平桃山学院大教授 「中国の四農問題の実態と政策転換のプロセス」
麻生太郎外相 「日本にとって経済外交とは何か」
朴槿恵ハンナラ党代表 「韓日関係の新しいビジョン」
大沼保昭東大大学院教授 「『護憲的改憲論』の根拠」
長谷部恭男東大教授 「立憲主義と平和主義」
西修駒大教授 「憲法改正論議：比較憲法の視野も含めて」
田中浩一郎エネ研/群森泰助東京財団 「イラン核問題」
大日方邦子アルベンスキー選手 「金メダリストの挑戦―トリノ・バリンピックを終えて―」
鈴木修スズキ会長 「もの作りの『現場主義』」
田中均前外務審議官 「北朝鮮との交渉はトップの権威のもとで」
麻生太郎外相 「中央アジアを『平和と安定の回廊』に」
D・ヒリング・フィナンシャルタイムズ東京支局長 「小泉さんは何を『改革』したのか」(日・英)
福井俊彦日銀総裁 昼食会
S・ジェームソン元ロサンゼルス・タイムズ東京支局長 「『小泉首相』のプラスとマイナス」
町田顕最高裁長官 「裁判員制度について」
額賀福志郎防衛庁長官 記者会見
A・ダウナー豪外相 「日豪：グローバル・パートナーシップ」(日・英)
H・K・シン駐日インド大使 「日印関係を考える」(日・英)
但木敬一検事総長 「日本的民主主義と裁判員制度」
玉木明フリーランサー 「人間のまなざしをもったニュース報道」
金容雲日韓文化交流会議韓国側座長 「韓日関係のこれから」
自民党総裁候補討論会 「どんな国、どんな社会を目指すのか」
渡辺靖慶慶応大学教授 「アメリカ：『恐怖の文化』とコミュニティー」
中川秀直自民党幹事長 「日本保守政治の画期としての安倍政権の誕生」
P・ゴフ・NZ国防・貿易相 「両国関係の未来構築のために」(英文)
羽生善治三冠 「将棋は日本文化の特異性を反映したもの」
トーマス・シーファー駐日米大使 昼食会(日・英)
宮家邦彦立命館大学客員教授 「アメリカの中東外交」
A・ロシュコフ駐日ロシア大使 「北東アジア情勢と日ロ関係」
胡鞍鋼清華大学公共管理学院教授 「中国第11次5カ年計画 目標と考え方の変化」
本間正明政府税調会長 「税制は民主主義の学校」
小菅正夫旭山動物園園長 「動物園は『生命』を伝える」

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■「EmEO沖縄」設立記者会見・パーティー

EmEOとは採用 (Employ)、教育 (Education)、遠隔開発 (Offshore) の頭文字。首都圏でIT関連事業を営む沖縄出身者らが(株)EmEOを設立、平良忠信社長らが会見した。沖縄と関東のIT企業が連携をとり沖縄での情報通信産業の振興と人材育成・採用の支援などを目的とする。(06.12.20 小会議室・10階ホール)

照会先：(株)EmEO (本社・浦添市) Tel: 098-870-4137
http://www.emeo.co.jp/

■日本労働ベンクラブ総会・懇親会

労働問題をカバーするジャーナリストの集まりで、メンバーは約200人。懇親会には柳沢厚労相、高木連合会長、坂内全労連議長、笹森元連合会長、富塚元総評事務局長など政労使界の現役・OBら約150人が出席した。(1.10 宴会場・10階ホール)

照会先：日本労働ベンクラブ事務局 Tel: 03-3201-0606

■高連協「環境問題とシニア」

高齢社会NGO連携協議会は高齢社会の問題に取り組むNPOのネットワーク。現在、54団体が加盟している。シニアが取り組む環境問題をテーマに松本作衛元農水事務次官 (国際食糧農業協会理事長) が講演した。(1.12 大会議室)

照会先：高齢社会NGO連携協議会 Tel: 03-3542-0363
http://www.janca.gr.jp/

■日本食育学会第1回理事会

昨年11月に「日本食育学会」が設立された。学者、研究者だけでなく、生産、加工、流通、消費、メディアなど様々な立場から「食育」に関する研究や運動などを行うことを目的としている。学会長は中村靖彦氏 (NHK OB)。(1.13 宴会場)

照会先：日本食育学会事務局 Tel: 03-3425-3945
http://www.shokuiku-gakkai.jp/

■政経文化クラブ1月新春例会

「60歳でボケる人 80歳でボケない人」のテーマで湘南長寿園病院のフレディ松川院長が講演した。同クラブは共同通信社の後援を得て講演会の開催や会員相互の交流の場として活動している。(1.15 10階ホール)

照会先：奈良新聞東京支社 Tel: 03-5565-0031

■東京テクノ・フォーラム21 研究交流会

同フォーラム (代表=滝鼻卓雄・読売東京本社社長) の第99回研究交流会は、京大再生医科学研究所の山中伸弥教授が「誘導多能性幹細胞 (iPS細胞)」をテーマに講演した。(1.15 10階ホール)

照会先：同フォーラム事務局 Tel: 03-3642-4197
http://www.techno-forum21.jp/

■イラク分析会「北イラク・クルド地域視察を終えて」

中東調査会の講演会。小川郷太郎イラク復興支援等調整担当大使が講演した。(1.15 宴会場)

照会先：中東調査会 Tel: 03-3371-5798 http://www.meij.or.jp/

新しいOB会員

■「こころを育む総合フォーラム」記者発表会

各界の有識者16人が心のあり方について提言をまとめ発表した。フォーラムを呼びかけた遠山敦子元文科相は「この提言が家庭、学校、地域社会、企業、メディアなどとも連携し国民的な運動の契機になれば」と語った。座長の山折哲雄国際日本文化研究センター名誉教授は「殺すなかれ、盗むなかれ、偽るなかれ」「早寝早起き朝ご飯」「足るを知る」などのキーワードを織り込みながら提言の骨子を説明した。提言は2月中旬冊子として刊行される (定価500円 送料など込み)。希望者ははがきに〒番号、住所、氏名、年齢、職業を書いて下記事務局「冊子係」へ。ホームページからも申し込める。(1.17 宴会場)

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階 松下教育研究財団内「こころを育む総合フォーラム」事務局 http://www.kokoro-forum.jp/

照会先：松下教育研究財団 Tel: 03-5521-6100

http://www.mef.or.jp

■日本ジャーナリスト懇話会1月例会

朝日新聞の外岡秀俊編集局長が「IT時代に対応する新聞のあり方」のテーマで講演した。(1.19 大会議室)

■2007年新潟県出身美術作家新春を祝う会

新春恒例の会。日本美術院同人の大矢紀氏、齋藤満栄氏など首都圏で活躍する新潟県出身の美術作家・評論家ら約60人が出席した。(1.23 レストラン・アラスカ)

■民放解説研究会新年会

年初恒例の民放解説委員と国会議員との新年会。安倍首相はじめ塩崎官房長官、菅直人民主党代表代行など20人を超える議員が国会開幕前夜に参集、民放の政治担当記者らと懇談した。(1.24 宴会場)

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**吉
カクテル****スタンダードジャズ・シリーズ
2月は「LAVIE EN ROSE
バラ色の人生」**

今月は赤ワインのクラレットをベースにしたカクテルです。シャンソンからイメージした吉富オリジナルの味をお試しください。

**宴会
プラン****個室での歓送迎会プラン**

(3月12日～6月2日)

春の異動の季節にあわせ、メニューを一新したパーティープランを用意します。社内の歓送迎会だけでなく個人的な集まりにもご利用ください。お一人3,300円(洋食9品+寿司、そば)で、飲物・部屋代は別ですが、1,200円をプラスして飲み放題(2時間)にすることもできます。なお、お酒の持ち込みは無料です。10人からお受けします。

予約・問い合わせは3503-2724の貸室担当へ。

**和
食****梅見懐石(3月2日まで)**

若竹の煮物やわかさぎの揚物など春を先取りした品々をおためしください。冷酒つきで5,250円です。

先付: 榮螺ひたし 椀盛: 湯葉真丈、もどし梅 刺身: 白梅台盛 焼物: 甘鯛べっ甲あん掛け 煮物: 若竹煮 揚物: わかさぎ新引揚げ 食事: 蟹雑炊 水菓子: 苺ほか

好評のあんこう鍋コース(3,780円)も3月2日まで提供しています。(板長: 薬科浩)

**洋
食****カニづくしコース(3月2日まで)**

3種類のカニを使ったフルコースです。カニはそれほど、という方にも、前菜のタラバの炙り焼きは気に入っていただけると思います。メインはワタリのクリームグラタンにカニ肉のピラフがつかます。これに前菜がもう一品と、中華風スープ、グラスワイン、デザートがついて4,200円です。(シェフ: 黒須修一)

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也
高橋利行 西田善夫 松本侑壬子

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

2007年度クラブ賞に11候補が推薦

今年の「日本記者クラブ賞」の候補者として11人が推薦されました(1月末で応募締め切り)。受賞者は推薦、選考の両委員会での審議を経て、4月19日の理事会で決定します。贈賞式は5月24日に開催される通常総会で行われます。

<寄贈書>

朝鮮半島「核」外交 重村智計会員
ヨーロッパで現代世界を読む(藤村信著) 熊田一恵氏
実名と報道 日本新聞協会
THE WORLD ALMANAC 2007 在日米国大使館報道部

<招待券> ご寄贈いただきました

日本新聞協会「言葉の戦士 涙香と定輔」

<法人会員代表変更>

南日本新聞社
(新) 水溜栄一 代表取締役社長
(旧) 永山 勇

<訃報>

有賀裕会員(共同出身、83歳)が1月7日死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 811人

個人会員 1,635人 法人・個人賛助会員 75社 184人
特別賛助会員 76人 名誉・功労会員 10人

計 221社 2716人

H P <http://www.jnpc.or.jp/>**「会見速記録」: 1月の新規掲載**

- 藤原和博・杉並区立和田中学校校長「中学校教育の現場から」(2007. 1. 12)
- 小菅正夫・旭山動物園園長「動物園は『生命』を伝える」(2006. 12. 1)
- 本間正明・政府税調会長「税制は民主主義の学校」(2006. 11. 29)
- 宮家邦彦・立命館大学客員教授「アメリカの中東外交」(2006. 11. 1)
- 有沢広巳・原子力産業会議会長「基本法の改正とこれからの原子力行政」(1977. 3. 17)

今後の行事予定(2/2現在)

- 2. 14(水) 15:00~16:30(宴会場)
津島雄二自民党税調会長 記者会見
- 2. 15(木) 15:00~16:30(宴会場)
著者と語る『北方領土問題』(中公新書)
岩下明裕北海道大学スラブ研究センター教授
- 2. 19(月) 15:00~16:30(10階ホール)
著者と語る『シーア派』(中公新書)
桜井啓子早稲田大学教授
- 2. 26(月) 15:00~16:30(10階ホール)
研究会「アメリカの底流」③
鈴木透慶応大学教授「映画から読み解く現代アメリカ」

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 岩下幸一郎 (毎日新聞東京本社 写真部)



嵐が去った後の晴天 富士山の山頂付近に濃い水蒸気の層が発生 夕日で伸びた山影が水蒸気のスクリーンに映り 幻の頂上が出現した (06. 10. 25)

遠望絶景

水蒸気のおかげで、富士山が実物より大きく見えたという珍しい写真であります。もっとも、なんかの拍子で実物より大きく見えちまうってことは、人間の世界でもありません。

二代も三代も続いた政治家のお家柄にお産まれ遊ばした、西洋風に申すなら「銀の匙をくわえて産まれた」若サマ、姫サマが「じばん、かんばん、かばん」の三ばんを親御サマからご継承遊ばし、お若いうちから大臣、党幹部と要職を駆け上っておいでになります。

容姿端麗、弁舌さわやかなうえに、先代、先々代、ときには先々々代のお名前が、水蒸気^のの役をするんです。日本一の高嶺をお目指し遊ばすのは、ま、当然なんです。

そういうお方が、一票持っているというだけの下じもの厳しい暮らしなど、お口の先ではともかく、ご実感遊ばされてはおいでにならないかと拝察いたします。そうでなきや、所得の諸控除は削る、高齢者の医療費自己負担は上げる、貯金の利息はゼロに近く、いずれ参院選後には消費税引き上げか、なんて政治がおできにはなれませんでしょ。

富士山は遠くから見ると、実に美しい。でも、近くへ寄るとゴミだらけ。政治家の皆様は、そんな悪口を言われぬよう、格差社会の是正に、どうぞお励み遊ばしませ。

(塚田 博康)